

中国民族楽器オーケストラの楽器編成に関する一考察

A study of the constitution of the Chinese Orchestra with traditional musical instruments

木 暮 朋 佳

キーワード：中楽団 華楽団 国楽団 民族楽団 二胡 高胡 革胡 唢呐 笙 揚琴 中阮 箏篪

1. はじめに

20年以上前に巨大な二胡（低音革胡）¹⁾のある中国民族楽器だけのオーケストラの演奏番組を見て衝撃を受けたことがあった。後から思えば、それは創立間もない頃の香港中楽団の日本公演であったろうと想像できる。バイオリン属が二胡属に置き換わった音色の豊かさと、バイオリン属の表現と遜色のないダイナミズムは、既存の西洋オーケストラにも匹敵すると感じられた。現在、その存在は中華圏全体に拡大し、香港やマカオを含む中国本土から台湾、シンガポールにまで及んでいる。近年は日本にもその波が波及し、日本華楽団さえ創設されている。また、数年前に行われた International Society for Music Education（国際音楽教育協会）の第29回北京大会²⁾でもこの類のオーケストラの演奏があり、中華圏では音楽教育の現場でもその存在を確かなものに行っていると考えられる。

そこで本稿ではこの中国民族楽器オーケストラの楽器編成について、個々の楽団により異なる楽器編成を明らかにするとともに、西洋オーケストラと対峙させることでその特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の対象

本研究の対象である中国民族楽器オーケストラは、香港とマカオでは「中楽団」、シンガポールは「華楽団」、中国大陸では「民楽団」又は「民族楽団」、台湾では「国楽団」と呼ばれている。現在の中国民族楽器

オーケストラは〈香港中楽団〉〈澳門（マカオ）中楽団〉〈中国中央民族楽団〉〈中国放送民族楽団〉〈上海民族楽団〉〈台湾国楽団〉〈台北市立国楽団〉〈高雄市国楽団〉〈シンガポール華楽団〉〈日本華楽団〉等がある。

3. 先行研究

中国民族楽器オーケストラに関して、黄泉鋒編(2011)『中国音楽導賞』の第1章「現代中楽団」³⁾では、香港中楽団を中心に置き、その歴史、楽器編成と楽団による相違、伝統的中国音楽との違い、曲目や作曲家、楽器改良・改革の歴史、全体的な評価などについてその概略が記述されている。その一般的な編成に関しては以下のようにまとめられている。

— “吹彈拉打”⁴⁾ の分類方法を使って現代の中国民族楽器オーケストラを分類すると、以下のような楽器が含まれる。

吹管類：梆笛、曲笛、新笛、大笛、(→横笛である。)

高音笙、次中音笙、低音笙、

(→ソプラノ笙、テナー笙、バス笙の3種)

高音唢呐、中音唢呐、次中音唢呐、低音唢呐、

(→ソプラノ、アルト、テナー、バスの唢呐4種)

高音管、中音管、低音管

(→ソプラノ、アルト、バスの箏篪の類3種)

彈奏類：琵琶、揚琴、古箏、小阮、中阮、大阮、三弦、箏篪

拉弦類：高胡、二胡、中胡、革胡、低音革胡

(→第1・第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)
打楽器類：定音鼓、排鼓、大鼓、小鼓、大鈸、小鈸、等

現代の中国民族楽器オーケストラは、主に中国大陸、台湾、香港、マカオ、シンガポール、マレーシア、フィリピン等の中華系の人々が集まる社会に存在する。どの楽団も“吹弾拉打”の分類による楽器を用いるが、やや異なる点もある。例えば、香港中楽団と台北市立国楽団の低音弦楽部では革胡と低音革胡を使っているのに対し、シンガポール華楽団ではチェロとコントラバスを使用している。また、中国放送民族楽団では、高音の弾奏楽部に柳琴を使っているのに対し、香港中楽団では小阮が使用されている。異なる外観を持つ異なる楽器だが、性能は似ているからである。

以上に述べた通常使用の楽器以外に、楽曲によりいくつかの特別な楽器も使用している。それは、板胡、京胡、月琴、埙、編鐘、等である。これらの楽器は常用ではなく、必要に応じて使用されている。⁵⁾ -

この他に第2章にあげた各楽団のホームページ⁶⁾にその編成に関する資料や映像資料などがある。

4. 研究の方法

まず、前掲の一般的な中国民族楽器オーケストラの楽器編成とその特徴を西洋オーケストラと比較しながら明らかにする。次に、第2章にあげた研究の対象である香港中楽団をはじめとした10例の楽団の楽器編成の考察にあたる。そして、前掲先行研究の「香港中楽団と台北市立国楽団の低音弦楽部では革胡と低音革胡を使っているのに対し、シンガポール華楽団ではチェロとコントラバスを使用している。」という指摘などを端緒にし、各々の楽団の相違点や特徴を明らかにする。その上で相違点を表にし、タイプ分けをしてグルーピングを試みる。また、各楽団の共通の楽器を視点とした「中国民族楽器オーケストラの楽器編成に関する特徴」も述べる。そして、その魅力と教材性にも言及する。

5. 中国民族楽器オーケストラの楽器編成

個々の楽団の楽器編成を述べる前に、黄泉鋒(2011)⁷⁾

にある配置図をもとに一般的な中国民族楽器オーケストラの特徴を、西洋オーケストラと比較しながらまとめておく。

図1は新たにこの配置図を元に作図し直したものである。西洋オーケストラのバイオリン属(第一バイオリン、第二バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)に対応するのがすべて二胡属(高胡、二胡、中胡、革胡、低音革胡)であり、バイオリン属と同じ擦弦楽器である。この置き換えが中国民族楽器オーケストラの一番の特徴であり、音色的に一番の魅力となっている。配置としては指揮者から見て最も左に高胡(第一バイオリン)、最も右に二胡(第二バイオリン)、高胡の後ろに中胡(ビオラ)、その中央奥に革胡(チェロ)、高胡と中胡の左奥に低音革胡(コントラバス)がある。高胡(第一バイオリン)と二胡(第二バイオリン)が指揮者の左右に位置し、中胡(ビオラ)が高胡(第一バイオリン)の後ろにあるのはヨーロッパに多い「対向型」の西洋オーケストラの配置に似ている。しかし、革胡(チェロ)と低音革胡(コントラバス)の低音弦楽器が右奥ではなく、左奥にあるのは「対向型」の西洋オーケストラとも大きく異なる点である。それでも第一バイオリンと第二バイオリンが左右に分かれる「対向型」の西洋オーケストラの配置は、同じように高胡と二胡が左右に分かれるこの楽団の楽器配置に影響を与えていると考えられる。しかし、楽器配置は楽団や楽曲により様々であり、図1の配置は全く固定的なものではない。一例を上げれば、香港中楽団は楽器配置がおよそ4通り以上はあり⁸⁾、革胡と低音革胡を右に配して西洋オーケストラの「アメリカ型」に近い楽器配置にするような例もある。

次に、楽器群の採用について西洋オーケストラと中国民族楽器オーケストラでは根本的な違いがあることを述べておく。それは、中国民族楽器オーケストラには西洋楽器分類の金管楽器が存在しないことである。演奏映像にあたると西洋オーケストラのトランペットを最高音域楽器とする金管属の強奏は唢呐4種(高音唢呐、中音唢呐、次中音唢呐、低音唢呐)で代替しているように見える。特に、高音唢呐は強奏の際にト

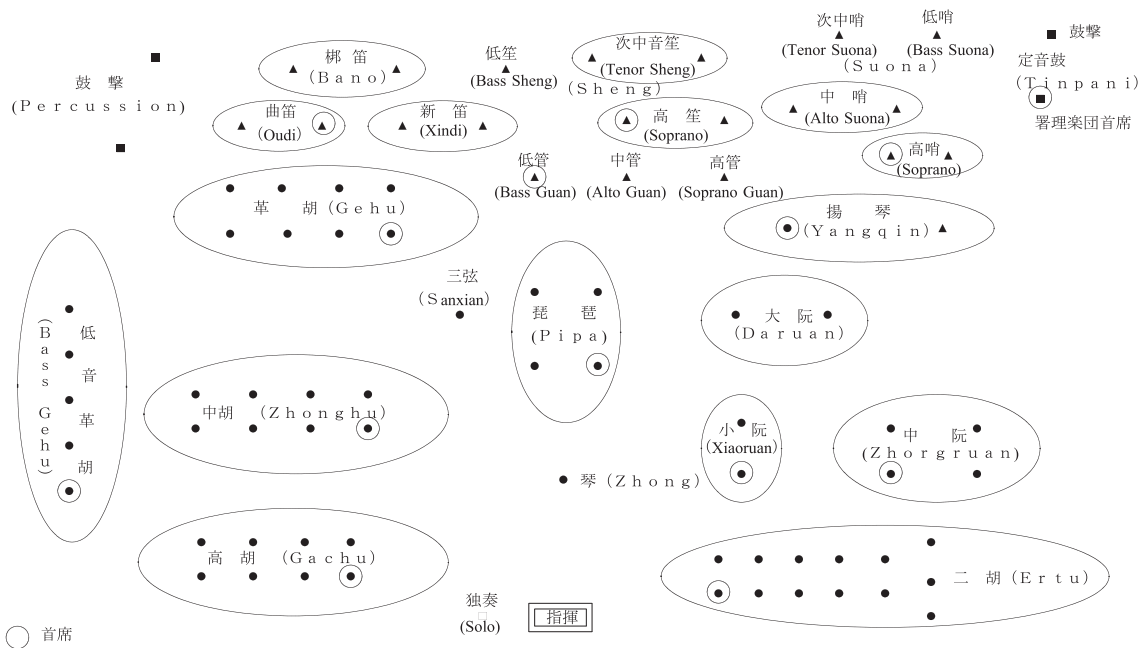


図1. 中国民族楽器オーケストラ配置図

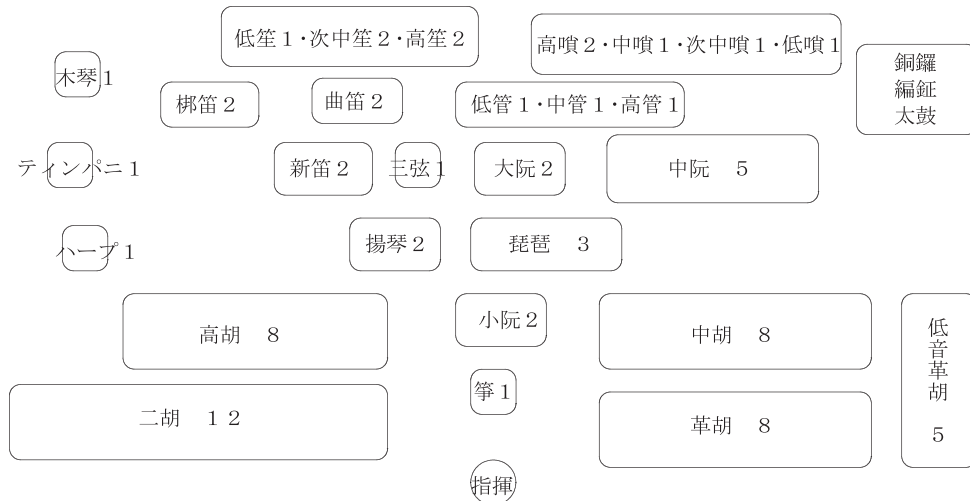


図2. 香港中樂團 (別配置)

ランベットのようベル（あさがお）が正面に持ち上げられ、音がストレートに観客に届くように演奏されている。比較的鋭い音色の唢呐は、強奏の中でも輝きを失わない。おそらく、そこが中国民族楽器オーケストラに金管楽器がない理由の一つであり、それはもう一つの特徴でもあろう。

さらに付け加えれば、西洋オーケストラではかなり少ない「弦を指やバチで弾いたり打ったりして音を出す」演奏楽器である琵琶、揚琴、古箏、柳琴、中阮、大阮、三弦、笙篁などが常時多数存在して、音色表現をさらに豊かにしていることも重要な特徴である。

以下に個々の楽団の楽器編成を示す。各々の冒頭に創立年などの簡単な情報と楽器配置も付け加える。

5.1 香港中楽団

香港中楽団は1973年に設立された香港市立のプロ楽団である。ホームページがあり⁹⁾、楽器編成に関してはそのホームページの演奏配置図から確認できる。以下のような楽器編成である。

- －吹管類：梆笛(2)、曲笛(2)、新笛(2)、大笛&巴烏等も使う。
 高音笙(2)、次中音笙(2)、低音笙(1)、
 (→ソプラノ笙、テナー笙、バス笙の3種)
 高音唢呐(2)、中音唢呐(1)、次中音唢呐(1)、低音唢呐(1)
 (→ソプラノ、アルト、テナー、バスの唢呐4種)
 高音管(1)、中音管(1)、低音管(1)
 (→ソプラノ、アルト、バスの箏篁3種)
- 弾奏類：琵琶(3)、揚琴(2)、古箏(1)、小阮(2)、中阮(5)、
 大阮(2)、三弦(1)、豎琴(1) (笙篁・柳琴も使う)
- 拉弦類：高胡(8)、二胡(12)、中胡(8)、革胡(8)、低音革胡(5)
 (→第1・第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)
 板胡・京胡等も使う。
- 打楽器類：複数の打楽器(5) ー括弧内は演奏者数

図2は香港中楽団の楽器配置図の別配置例である。図1は一般的な中国民族楽器オーケストラとして紹介されているが、ホームページの写真とこの図を照合すると、これも香港中楽団の楽器配置図であることがわかる。この図1の低音弦楽部（革胡と低音革胡）は向

かって左奥だが、図2は右側奥までの前列に移動している。これは明らかに西洋オーケストラの「アメリカ型」の影響を受けた楽器配置である。この他に弾奏属楽器を左に、二胡属楽器を右にと、まとめた配置のものもあり、4通り以上の様々な配置があるようだ。

ところで、この楽団には楽器の改良部門があるが、この楽団の特徴は、そこから生まれた、二胡の丸い筒状の胴を活かした革胡と低音革胡の存在であろう。革胡の「革」は改革の「革」だという。

5.2 マカオ中楽団

マカオ（澳門）中楽団は1987年に創設された澳門特別区文化局の公立のプロ楽団である。この楽団にはホームページがある¹⁰⁾。楽器配置図はないがその構成楽器は記述がある。以下のようなものである。

- －吹管類：笛子(3)
 高音笙(1)、次中音笙&低音笙(2) ー管はなし
 高音唢呐(2)、中音唢呐&次中音唢呐&低音唢呐(2)
- 弾奏類：琵琶(1)、揚琴(1)、古箏(1)、柳琴(2)
 中阮(2)、大阮(2)、ー三弦&小阮はなし
- 拉弦類：高胡(5)、二胡(7)、中胡(4)、大提琴ーチェロ(2)、
 低音提琴ーコントラバス(2) (低音2種は洋楽器)
- 打楽器類：複数の打楽器（楽器名なし）(4)
 ー括弧内は演奏者数

やや少人数の楽団である。ホームページの写真では低音弦楽部（チェロとコントラバス）の楽器配置は向かって右の2列目に確認できる。

5.3 中国中央民族楽団

中国中央民族楽団は1960年に周恩来により創立された文化部直属のプロ楽団である。楽器編成に関する記述は楽員全員の紹介という形でホームページに記載がある¹¹⁾。以下はその構成楽器である。

- －吹管類：梆笛(3)、曲笛(2)、新笛(1)、
 高音笙(5)、中音笙(2)、低音笙(2)
 →ソプラノ笙、アルト笙、バス笙の3種
 高音唢呐(4)中音唢呐(3)次中音唢呐(1)低音唢呐(3)

→ソプラノ、アルト、テナー、バスの哨呐4種
低音管(1)

弾奏類：琵琶(4)、揚琴(2)、柳琴(2)、古琴(1)、箏(2)、
中阮(6)、大阮(5)、豎琴(1)

三弦・箏篋・小阮は3種ともなし

拉弦類：高胡(10)、二胡(14)、中胡(9)、大提琴-チェロ(8)
貝司(ベース)-コントラバス(5)

～大提琴と貝司は以下の3つのタイプを使い分けている。

①丸胴(1997)②洋楽のチェロ及びコントラバス(2010)

③長なす胴(2013) ～ ()内はHP写真公演年

打楽器類：複数の打楽器(楽器名なし)(6)

付属する混声合唱団もある。 一括弧内は演奏者数

革胡と低音革胡は使用していない。

5.4 中国放送民族楽団

中国放送(廣播)民族楽団は1953年に創立した上海民族楽団と並ぶ歴史のあるプロ楽団である。彭修文が40年余り指揮と作曲に関わった。ここにはホームページがある¹²⁾。そこに演奏会楽器配置図はないが、構成楽器は示されており、以下のようである。

一吹管類：梆笛(1)、曲笛(1)、新笛(1～2)

高音笙(2)、中音笙(2)、低音笙(1)、

→ソプラノ笙、アルト笙、バス笙の3種

高音唢呐(4)、中音唢呐(3)、次中音唢呐(1)、

低音唢呐(1) →ソプラノ～バスの哨呐4種

管(2) →「管子」という記述

弾奏類：琵琶(6)、揚琴(4)、古箏(3)、柳琴(2)

中阮(7)、大阮(4)、三弦(1)、箏篋(1) 一小阮なし

拉弦類：高胡(8)、二胡(13)、中胡(5)、大提琴-チェロ(6)、

低音提琴-コントラバス(4)(低音2種は洋楽器)

(→第1・第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

打楽器類：複数の打楽器(楽器名なし)(6)

一括弧内は演奏者数

楽器配置として、ホームページの写真で確認できるのは、指揮者から向かって左最前列に高胡があり、右

の最前列指揮者近くに琵琶そしてその奥に中阮と大阮がある。低音弦楽部(チェロ&コントラバス)は右の2列目である。揚琴は中央2列目に2台ある。

5.5 上海民族楽団

上海民族楽団は1952年に上海楽団民族管弦楽隊として創立される。この種の楽団としては最古である。

ここにもホームページがある¹³⁾。そこに演奏会楽器配置図はないが、メンバー紹介の記述から構成楽器が推測できる。以下のようである。

一吹管類：竹笛(5～6)-梆笛、曲笛、新笛など

高音笙(1)、次中音笙(1)、低音笙(1)

(→ソプラノ笙、テナー笙、バス笙の3種)

唢呐(8～9)- (高音、中音、次中音、低音の唢呐)

(→ソプラノ、アルト、テナー、バスの哨呐4種)

管はなし。

弾奏類：琵琶(6)、揚琴(3～4)、古箏(1～2)、柳琴(3)、中阮(7)、
大阮(3)、箏篋(1) 一小阮と三弦の2種はなし。

拉弦類：高胡(8)、二胡(14)、中胡(7)、大提琴-チェロ(4)、

低音提琴-コントラバス(5)

(→第1&第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

打楽器類：複数の打楽器(8～9) 他に声楽担当4名

一括弧内は演奏者数

低音弦楽部(チェロ・コントラバス)の楽器配置は指揮者右側2列目の位置である。

5.6 台湾国楽団

台湾国楽団は1984年に国立芸専実験国楽団として国の後押しで創立し、2008年に台湾国家国楽団、2012年に台湾国楽団と改称して現在に至っている。ホームページがあるが¹⁴⁾、編成に関しては記述がない。しかし、映像資料が数曲あり、編成は以下のように確認できた。

一吹管類：梆笛・曲笛・新笛(4)、

高音笙(2)、次中音笙(1)、低音笙(1)

(→ソプラノ笙、テナー笙、バス笙の3種)

高音唢呐(2)、中音唢呐(1～0)、次中音唢呐(1)、低音唢呐(1)

(→ソプラノ、アルト、テナー、バスの哨响4種)

管はなし。

弾奏類：琵琶(2)、揚琴(2)、柳琴(2)、中阮(3)、大阮(2)、
ハーブ(1) 古箏と小阮と三弦と箏篋の4種はなし。

拉弦類：高胡(7)、二胡(12)、中胡(5)、大提琴-チェロ(5)、
低音提琴-コントラバス(4) (低音2種は洋楽器)

(→第1・第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

打楽器類：複数の打楽器(5) 一括弧内は演奏者数

楽器配置としては指揮者から見て左前列に高胡(第1バイオリン)、右前列に二胡(第2バイオリン)があり、この点は第3章に示した一般的な中国民族楽器オーケストラや香港中楽団の一例とも同様である。異なるのは、中胡(ビオラ)が指揮者のすぐ前にある点であるが、チェロ(大提琴)とコントラバス(低音提琴)がおおよそ左奥にあり、拉弦類(擦弦楽器類)の配置は全体として一般的な例に近い。弾奏類として西洋楽器のハーブ(「豎琴」と表記)が使われ、ハーブに近い楽器である古箏や箏篋は使わないようである。おそらく、そこがこの台湾国楽団の特徴かも知れない。

5.7 台北市立国楽団

台北市立国楽団は1979年に創立した台湾で始めてのプロ楽団である。ホームページがあり¹⁵⁾、そこには60人と70人編成の楽器配置図がある。その70人編成の楽器配置図から楽器編成をつくると以下のようである。

一吹管類：梆笛(2)、曲笛(3)、新笛(2)、半音笛導入検討中。

高音笙(2)、次中音笙(2)、低音笙(1)

(→ソプラノ笙、テナー笙、バス笙の3種)

高音唢呐(2)、中音唢呐(2)、次中音唢呐(1)、低音唢呐(1)

(→ソプラノ、アルト、テナー、バスの哨响4種)

高音管&中音管&低音管は唢呐奏者が兼ねる。

(→ソプラノ、アルト、バスの箏篋3種)

弾奏類：琵琶(4)、揚琴(2)、古箏(1)、中阮(4)、大阮(3)、
豎琴(1)、柳琴(2)、三弦&箏篋はなし。

小阮&高音琵琶は導入検討中。

拉弦類：高胡(6)、二胡I(7)、二胡II(7)、中胡(6)、

革胡-チェロも使用(7)、

倍革胡-コントラバスも使用(4)

(→第1&第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

大胡の導入検討中。

打楽器類：定音鼓-ティンパニなど複数の打楽器(5)

※導入検討中はHPにその記載あり。一括弧内は演奏者数

この楽団は低音弦楽部として革胡と倍革胡(低音革胡)を使用しており、それは第3章の先行研究にあげた引用部分でも述べられている。しかし、ホームページではチェロとコントラバスを使用した全体写真が掲載されており、「基本的には革胡と倍革胡(低音革胡)使用で、時としてチェロとコントラバスも使う」と認識することにする。また、西洋オーケストラではバイオリン属による弦楽合奏部は5部(第1バイオリン、第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)に分けるが、この楽団では高胡、二胡I、二胡II、中胡、革胡(時にチェロ)、倍革胡(時にコントラバス)のように二胡を2つに分け、全体で6部であり、内声の充実した弦楽合奏を生み出す編成を採用しており、革胡と低音革胡の使用とこのことが台北市立国楽団の特徴と言えるだろう。

5.8 高雄市国楽団

高雄市国楽団は1989年に高雄市実験国楽団として創立し、2000年に高雄市国楽団と改称したプロ楽団である。Facebookに簡単なホームページがあり、楽器編成の記述もある¹⁶⁾。以下のようである。

吹管類：笛子(3) (梆笛、曲笛、新笛を含むと考えられる。)

高音笙(1)、中音笙(1)、低音笙(1)

(→ソプラノ笙、アルト笙、バス笙の3種)

高音唢呐(1)、中音唢呐(1)

(→ソプラノ、アルトの哨响2種)

次中音唢呐・低音唢呐・管の3種はなし。

弾奏類：琵琶(2)、揚琴(2)、柳琴(2)、古箏(1)、中阮(2)、
大阮(2)、小阮・三弦・箏篋の3種はなし。

拉弦類：高胡(3)、南胡(4)、中胡(2)、大提琴-チェロ(4)

低音提琴-コントラバス(2)

(→第1・第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

打楽器類：複数の打楽器(4) 一括弧内は演奏者数

拉弦類の数を抑え、台湾では南胡と呼ばれることの多い二胡を用いているのは他のすべての楽団と同様である。やや小編成であるが、中国の昔ながらの合奏に近いとも考えられる。低音弦楽部(チェロとコントラバス)の楽器配置は指揮者に向かって左奥である。

5.9 シンガポール華楽団

シンガポール華楽団もホームページがある¹⁷⁾。楽員紹介があり、そこから楽器編成が推し量れる。

以下のようなのである。

一吹管類：梆笛(1~2)、曲笛(1~3)、新笛(1~3)

高音笙(2)、中音笙(1)、低音笙(1)

(→ソプラノ笙、アルト笙、バス笙の3種)

高音唢呐(2)、中音唢呐(2)、次中音唢呐(1)、低音唢呐(1)

(→ソプラノ、アルト、テナー、バスの唢呐4種)

高音管(1)一中音管&低音管を含む

(→ソプラノ、アルト、バスの簞篋3種)

弾奏類：琵琶(5)、揚琴(2)、柳琴(1~2)、中阮(5~8)、大阮(1~2)、三弦(1~0)、豎琴(1~0)、箏篋(1~0)、古箏(0~2) 小阮はなし。

拉弦類：高胡(8)、二胡(12~13)、板胡(1~0)中胡(7)、

大提琴-チェロ(6)、低音提琴-コントラバス(4)

(→第1&第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

打楽器類：複数の打楽器(7~8) 一括弧内は演奏者数

ホームページの演奏会映像から判断すると、低音弦楽部(チェロとコントラバス)の楽器配置は指揮者の向かって左奥である。

5.10 日本華楽団

日本華楽団は1997年に上海出身のコンリンの指導のもとに創立された大阪を拠点とする楽団である。多くは日本人でありアマチュアのようなのである。ホームページがあり¹⁸⁾、「楽団の概要」という表現で楽器数は明らかでないが、使用楽器について多少述べている。2つの公演写真も含めて以下のようにまとめる。

一吹管類：笛子(梆笛、曲笛、新笛など)

巴烏(バウ、金属リード発音の横笛)

高音笙、次中音笙、低音笙、

(→ソプラノ笙、テナー笙、バス笙の3種)

高音唢呐(中音唢呐・次中音唢呐・低音唢呐は未使用か)

(→ソプラノ、アルト、テナー、バスの唢呐4種)

管はなし。(→ソプラノ、アルト、バスの簞篋3種)

弾奏類：琵琶、揚琴、古箏、小阮、中阮、大阮、

柳琴・三弦・箏篋の3種はなし。

拉弦類：高胡、二胡、中胡、低胡(革胡・長なす胴・チェロ)

大胡(低音革胡)

拉弦類は総勢40~50人

(→第1・第2バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバス)

※低胡と大胡はこの楽団のHP上ではそれぞれチェロとコントラバスに対応するとしているが、一般的にはもっと小ぶりの楽器を指すようである。

打楽器類：複数打楽器(排鼓、大鑼、雲鑼、ティンパニ等)

一全体的に演奏者数は特定できない。

ホームページには2つの公演写真が掲載されているが、ホームページ全体に見える公演写真と2012年10月第16回定期公演では明らかに楽器配置が異なっている。前者は革胡類と低音革胡が舞台に向かって左及びその少し奥にあり、一般的な例などと同じである。後者は革胡と低音革胡が指揮者右側2列程度奥にあり、マカオ中楽団と同様であり、2回の香港中楽団の別配置にも近い位置である。後者は西洋オーケストラの「アメリカ型」の影響を受けていると考えられる。

6. 中国民族楽器オーケストラの楽器編成によるグルーピング案

表1は前章であげた10楽団の特徴となる楽器の有無を中心に記し、その表下には、この10楽団すべてに使用されている楽器も付している。この表を元にしてグルーピングを試みる。その基準であるが、先の「研究の方法」で述べたように、オーケストラ表現の主体である二胡を中心とした擦弦楽部の低音楽器の選

表1 擦弦類弾奏類吹管類

楽 団 名 事 項	擦弦類					弾奏類					吹管類				
	パート数	低音弦楽部				少弦			多弦		管の使用	唢呐の使用種類数	大笛の使用		
		革胡と低音革胡	丸胴	長なす胴	チェロとコントラバス	低音弦楽部の位置	柳琴の使用	小阮の使用	三弦の使用	古箏の使用				豎琴（ハープ）の使用	箏篋の使用
1.香港中楽団	5	○	×	×	×	右前列	△	○	○	○	○	△	○	4	△
2.マカオ中楽団	5	×	×	×	○	右二列	○	×	×	○	×	×	×	3 ~ 4	×
3.中国中央民族楽団	5	×	△	△	△	右二列	○	×	×	○	○	×	○	4	×
4.中国放送民族楽団	5 ~ 6	×	×	×	○	右二列	○	×	○	○	×	○	○	4	×
5.上海民族楽団	5 ~ 6	×	×	×	○	右二列	○	×	×	○	×	○	×	4	×
6.台湾国楽団	5 ~ 6	×	×	×	○	左 奥	×	×	×	×	○	×	×	4	×
7.台北市立国楽団	6	○	×	×	△	右前列	×	△	×	○	○	×	○	4	×
8.高雄市国楽団	5	×	×	×	○	左 奥	○	×	×	○	×	×	×	2	×
9.シンガポール華楽団	5	×	×	×	○	左 奥	○	×	△	△	△	△	○	4	×
10.日本華楽団	5	△	△	×	○	右二列	×	△	×	○	×	×	×	1 ~ 2	×

○：常用 △：使用することもある ×：なし

☆すべての楽団が使用している楽器

擦弦類： 高胡、二胡（別名「南胡」）、中胡

弾奏類： 琵琶、揚琴、中阮、大阮

吹管類： 梆笛、曲笛、新笛、高音唢呐、高音笙、次中音笙、低音笙

打楽器類： 定音鼓（ティンパニ）等

択を先行して問題にすべきだと考える。黄泉鋒(2011)では香港中楽団と台北市立国楽団は革胡と低音革胡を使用し、シンガポール華楽団ではチェロとコントラバスを使用すると述べているが、この二通りだけではなく、中国中央民族楽団のように、革胡や低音革胡も使うが、丸胴と長なす胴の貝司(ベース)が低音弦楽部として使用されているということが前章の分析としてわかっている。そこで、こうした楽器と革胡と低音革胡、つまり低音弦楽部用に改良された楽器をすべて含んでA「低音弦楽部に改良楽器を使う楽団」とB「低音弦楽部にチェロとコントラバスだけ使う楽団」という内容と表現で分けることが実態に沿う分け方であると考え。この分け方に従えば以下のようなようである。

A「低音弦楽部に改良楽器を使う楽団」

香港中楽団、中国中央民族楽団、台北市立国楽団、日本華楽団 (以上4つの楽団)

B「低音弦楽部にチェロとコントラバスだけ使う楽団」

マカオ中楽団、中国放送民族楽団、上海民族楽団、台湾国楽団、高雄市国楽団、シンガポール華楽団 (以上6つの楽団)

以上のようにグルーピングできるが、A「低音弦楽部に改良楽器を使う楽団」について若干補足する。それは日本華楽団を除いて、香港中楽団、中国中央民族楽団、台北市立国楽団については「管の使用」と「ハーブ(豎琴)の使用」がさらに共通しており、また、日本華楽団を含め「古箏の使用」も共通している。この4つの楽団の違いを述べれば、香港中楽団は「低音弦楽部に改良楽器である革胡と低音革胡だけを使う楽団」である。中国中央民族楽団は「低音弦楽部に丸胴又は長なす胴の改良楽器を使う他にチェロとコントラバスも使う楽団」である。台北市立国楽団は「低音弦楽部に改良楽器である革胡・低音革胡を使うがチェロとコントラバスも使う楽団」である。日本華楽団は確定していないと判断すべきであるが、革胡などの改良楽器も使っているため、このAグループに属することになる。以上のように、このA「低音弦楽部に改良楽器を使う楽団」グループは微妙に違いもある。

この他の視点としては、中国放送民族楽団の柳琴使

用と香港中楽団の小阮使用が上例の指摘の続きにあるが、柳琴の6~7楽団の使用に比べ、小阮の使用は1~2楽団程度であり、しかも香港中楽団は柳琴も時に使用することもあるので、グルーピングの視点としてはふさわしくないと考えられる。

この他に管の使用の有無や、洋楽器のハーブ(豎琴)にするか復元楽器の箜篌にするかという点が考えられるが、低音弦楽部の違いほど大きな視点ではないと思うのでグルーピングは低音弦楽部の違いによる一つをあげることにする。尚、楽器編成に関連して、楽器配置も記したが、各楽団とも様々な形態を取り、グルーピングの視点としては不向きであると判断した。

7. 中国民族楽器オーケストラ楽器編成の特徴

ここでは表1下の「すべての楽団が使用している楽器」のリストを主に、表1の楽団による使用楽器の相違点も考慮しながら、中国民族楽器オーケストラの楽器編成の特徴を以下のように解説する。

表現の中心である擦弦楽器に高胡、二胡、中胡を必ず使い、その低音として、チェロとコントラバスか革胡と低音革胡、又は丸胴、長なす胴の改良楽器を使う。弾奏楽器は琵琶、揚琴、中阮、大阮を必ず使い、ほとんどが古箏も使う。金管楽器は使わず、木管楽器の笛類は梆笛、曲笛、新笛を必ず使う。高音笙、次中音笙、低音笙はすべてで使われ、トランペットのように高音唢呐が活躍し、ほとんどの楽団で中音・次中・低音の唢呐も使う。時に、管(簫類)、ハーブ(豎琴)か箜篌、三弦、小阮、柳琴も使う。打楽器は洋楽器のティンパニ(定音鼓)が必ず使用され、種々な太鼓や木琴、鉄琴、銅鑼、編鐘などが曲によって様々に色を添える。これが中国民族楽器オーケストラの楽器編成である。

8. 中国民族楽器オーケストラの魅力

中国民族楽器オーケストラの魅力として第一にあげられるのは、西洋オーケストラにはない楽器の音色に親しめることだろう。それは、時に単独の楽器であり、同属楽器アンサンブルであり、また、それが様々なミックスされたものであり、すべての楽器の全合奏であっ

たりするわけだが、いずれも聴く側に新しい音色の楽しみを供給するものである。特に、オーケストラの主となる擦弦楽器が二胡属であることは、旋律に独特な哀愁を生み、現代的な手法にも及ぶ幅広い表現力も兼ね備えている。第二の魅力は、中華圏としてのアイデンティティーがあり、そこに住む人々、それは広く中国民族と言っても良いが、そうした人々の自文化の再確認と再創造の機会を確実に与えていることである。例えば、世界的に有名な中国人作曲家の譚盾（タン・ドゥン）の「西北第一組曲」は香港中楽団 25 周年演奏会の事前人気投票で合奏部門のベストテンに入っており、このことを如実に物語った一例である。日本でも武満徹のような世界的評価の高い作曲家が西洋オーケストラの為に創った名作も確かにあるが、そこに日本民族楽器オーケストラがあったなら、どんなすばらしい作品が生まれていただろう。そうした動きは宮城道雄の作品や武満徹と黛敏郎の新作雅楽、三木稔と日本音楽集団など、なかったわけではないが、中国民族楽器オーケストラのような規模と認知度には到底及ばなかったと言える。第三にあげるのは、中国民族楽器オーケストラの多くが付属の子どもや青年の楽団と伝統楽器の教育プログラム等を持っている点である。このことは日本では到底望めない状態で、一般市民が伝統的な楽器や音楽を習う習慣は、30 年程前に失ってしまった。日本人の音楽的アイデンティティーは、今どこにあるのか、どう回復させたら良いのか、見通しは暗いが、この中国民族楽器オーケストラのこのようなあり方と方法に一つの解答があるように思える。

香港の九龍にある音楽・演劇ホール香港文化中心（センター）の付属楽団は香港交響楽団と香港中楽団で、毎月 3～4 回以上の定期公演を行っている。北京、上海、台北、シンガポールといった他の都市でも同様で、西洋オーケストラである交響楽団と中国民族楽器オーケストラが各都市の中心的なホールにあり、公的な財政援助を受けて音楽活動と教育活動をしている。つまり、中国民族楽器オーケストラの存在で、中華圏としての音楽的アイデンティティーを確保する姿勢ができていていると言える。このことは日本に映して考える

べきであり、その一つの規範として重要である。

9. 中国民族楽器オーケストラの教材化の視点

前章までで本論のテーマは結論されており、教材化については稿を改めて論ずるべきであるが、発展的課題として教材化の視点を以下に箇条書きで付加する。

9.1 大局的な意味の視点

- 中国本土（北京や上海など）、香港、マカオ、台湾（台北や高雄など）、シンガポールなどのアジアのかなり広域の中華圏に共通した音楽文化動向であること。
- アジア中華圏の各国主要都市や地方都市に楽団があり、楽器編成スタイルがおおよそ確立し、その共通点も多い。そして、西洋オーケストラの比較対照として十分な形態と存在となっていること。

- 新興の中国文化として秀逸であること。

- 音楽の西洋化の過程での日本とは違った方向を取った音楽文化モデルであること。

9.2 個別な視点

- たくさんの中国民族楽器に接することができ、楽器の音色体験を一度に拡大できること。

- 映像音楽資料が豊富なこと。（DVD、VCD、CD）

- 30 年以上の歴史の中で、現代音楽的手法や教育的目的の曲など様々な新曲や編曲が生まれ、今尚それらが付加され、盛んにコンサートが行われていること。

- 描写的な作品も多く、音楽が分かりやすく親しみやすいこと。

- その一方で、芸術性も高く、演奏技巧の高さも追求している作品も多いこと。

- 楽器の改良改革という視点を電気的手段以外で実現していること。

9.3 教材化の例

- リムスキー・コルサコフ作曲の「熊ん蜂は飛ぶ」の西洋オーケストラ編曲演奏と林樂培作曲の「昆虫の世界」から「第一段「働き蜂がブンブン飛ぶ」」の中国民族楽器オーケストラの演奏を聴き比べさせる。バイオリンと二胡がどのように違い、どんな工夫をしているのか、好きな方はどちらかなどを意見交換や討論の後に文章化も含めて批評させる。

・上例と同じように、ベンジャミン・ブリトン作曲「青少年の為の管弦楽入門」と関廼忠作曲「管弦楽糸竹知多少（管弦楽器をいくつご存知？）」を聴き比べる。同属楽器で対照できる部分の演奏はその違いを聴き取らせ、どちらかのオーケストラにしかない同属楽器の演奏ではそのオーケストラの特徴としてそこを聴かせる。かなり詳細に楽器の音色の違いを聴くことになり、聴体験を飛躍的に拡大できるだろう。

・こうした曲の鑑賞を通じて、最終的には西洋オーケストラと中国民族楽器オーケストラのそれぞれの面白さや、欧米文化と中国文化そして日本の文化の面白さと大切に気づかせることが目標となるだろう。

10. 終わりに

以上、中国民族楽器オーケストラの楽器編成について、個々の楽団による違いを明らかにし、西洋オーケストラとも比較しながら、その魅力や教材性についても言及する事ができたと思う。特に、グルーピングに関しては、A「低音弦楽部に改良楽器を使う楽団」とB「低音弦楽部にチェロとコントラバスだけ使う楽団」という基準で2つに分けることが理にかなうものと考えている。

本論ではホームページなどを主に個々の楽団の特徴を調べることで中国民族楽器オーケストラの概要を把握することに重点をあてた。今後はさらに資料の詳細にあたり、その全貌を明らかにしたいと思う。

いずれにしても、中国民族楽器オーケストラが西洋オーケストラと並ぶ表現手段として伸長していることは事実であり、教材としても意義深いものがある。

今後、国際文化理解の観点も含め、重要な意味を持つていくことに間違いはないと考える。

註

- 1) 革胡は西洋オーケストラではチェロに該当し、さらに低音である低音革胡はコントラバスに該当する。二胡と同じ円筒の胴を持つ改良・改革楽器である。低音革胡は台北市立国楽団では倍革胡と呼ばれている。
- 2) ISME と略称され、世界的な音楽教育研究発表の場である。第 29 回北京大会は 2010 年に行われている。
- 3) 原文は繁体字の中国文（中文）である。
- 4) “吹彈拉打”は中国の伝統的な楽器分類法である。「吹」は吹く楽器、「弾」は弾く楽器、「拉」は擦る楽器、「打」は打つ楽器を表し、この4つに楽器を分類する。尚、本論では拉弦類と擦弦類は同じ意味で使う。
- 5) 黄泉鋒編(2011)『中国音楽導賞』商務印書館刊 第1章 pp.5 -9 記載文は筆者訳出であり、()内は筆者が付加している。
- 6) 各楽団 HP アドレスは以下の 9) ~18) 参照。
- 7) 5) に同じ。
- 8) 陳明志編著(2004)「中樂因悠更動聽－民族管弦樂導賞（上冊）」pp.146 -147
- 9) 香港中樂団
http://www.hkco.org/HKCO_Friends.aspx?channel=1&pagenumber=12&lang=C
- 10) 澳門（マカオ）中樂団
<http://www.icm.gov.mo/ochm/2007net/defaultC.aspx>
- 11) 中国中央民族楽団
<http://www.chinacno.org/>
- 12) 中国廣播民族楽団
<http://www.cbpg.cn/gbmzyt/yybz.php>
- 13) 上海民族楽団
<http://www.sh-co.com.cn/index.aspx>
- 14) 台湾国楽団
<http://nco.ncfta.gov.tw/NCO/Code/Video.aspx>
- 15) 台北市立国楽団
<http://www.tco.taipei.gov.tw/mp.asp?mp=119041>
- 16) 高雄市国楽団
<http://zh-tw.facebook.com/pages/%E9%AB%98%E9%B8%82%E5%9C%8B%E6%A8%2E5%9C%98/131813126885013?sk=info>
- 17) 新加坡（シンガポール）華楽団

<http://www.sco.com.sg/chinese/singapore-chinese-orchestra/musicians/>

18) 日本華楽団

<http://www.gonglin.com/kagakudan 02.html>

追記) 本論のきっかけとなった前掲5) 黄泉鋒編『中国音楽導賞』商務印書館刊第1章の訳出について、本学中国語講座担当の黄連泰先生に多大なるご協力を頂いた。ここに深く感謝の意を表す。